

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第7章 キリストの生涯と働きにおける祈り①



序論

キリストによる祈りの実践について学ぶ際には、まずはキリストご自身の独特なご性質について深く思いめぐらさなければなりません。

主イエス・キリストは、“人間であるとともに神である方”でした。“神の御子であると同時に人の子”でもあり、この事実からはそのまま、四つの問いが生じてきます。

1. キリストは誰に祈っておられたのでしょうか。
2. キリストが神であるということは、神が神に祈っておられたのでしょうか。
3. キリストが神であるということは、キリストはご自分に祈っておられたのでしょうか。
4. キリストが神であるということは、そもそもキリストはなぜ祈る必要があったのでしょうか。

1. キリストは誰に祈っておられたのでしょうか。

記録を見ると、これは非常にはっきりしています。福音書は18回にわたり、キリストは祈りを天の父に向けられたと記しています。これらの例のうち5箇所には細かい描写も含まれていますが、祈りの向けられている対象として他の存在を示唆している箇所はまったくありません。「天地の主であられる父よ」（マタイ 11:25、ルカ 10:21）、「わが父よ」（マタイ 26:39,42）、「アバ、父よ」（マルコ 14:36）、「聖なる父」（ヨハネ 17:11）、「正しい父よ」（ヨハネ 17:25）、「父よ」（マタイ 11:26、ルカ 10:21、22:42、23:34,46、ヨハネ 12:27-28、17:1,5,21,24）といった通りです。祈り方を教えてくださいという弟子たちの求めに応じたイエスは、「私たちの父よ」（マタイ 6:9、ルカ 11:2）と祈るよう教えておられますが、その祈りにご自分を含めることもなければ、「わが父よ」とおっしゃる際にも他の誰を含めてもいないのです。一箇所、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイ 27:46）と、神に祈っておられますが、これは、十字架におけるご自分の思いの表現として詩篇 22 篇を引用する、イエスなりの手法であったのです（詩篇 22:7-8,14-17）。

2. キリストが神であるということは、神が神に祈っておられたのでしょうか。

この問いへの答えは、先の問いへの答えほど単純なものではありません。というのも、この問いは、かなり深い神学の領域に踏み込んでしまうからです。イエスがまさに神であったということは、聖書ではしっかりと確立されています（マタイ 1:23、ヨハネ 20:28、ヘブル 1:8 参照）。にもかかわらずイエスは、人間としてのご性質

を身にまとわれた際、ご自分のご栄光は脇に置かれました（もちろん、神としてのご性質は放棄されませんでした。ピリピ 2:5-7 参照）。私たちと同化されながらも、イエスは、完全に人間であると同時に、依然、完全に神であられたのです。しかし、イエスは、肉体の内にあることの限界を受け入れられました。その結果、イエスは、父なる神との交わりを持つためにはご自分の声を用いられました。三位一体の神のうちに明らかな交わりが存在することを軽く見てはなりません（創世記 1:26 参照）。確かにこの交わりの本質は人間の理解を超えたものながらも、イエスが父なる神にお捧げになった祈りの内容としては、記録されている以外のものもあったと思われるからです。

3. キリストが神であるということは、キリストはご自分に祈っておられたのでしょうか。

私たちも独り言は言うものですが（例えば詩篇 42:11 参照）、私たちの立場では自分自身に祈るというのは奇妙なことです。神の御子として、キリストはまさに神ですが、同時に、三位一体の神の第二格でもあられます。三位一体なる神の各位格はそれぞれ独自の位格ですから、キリストはご自分に向かって祈っておられたわけではありません。御子なる神が父なる神に祈っておられたのです。

4. キリストが神であるということは、そもそもキリストはなぜ祈る必要があったのでしょうか。

イエス・キリストは神ですが、地上におられた間、神だけであったわけではありません。神であり、人である方だったのです。神としては、（先に述べたような三位一体の中での交わりということは別にして）イエスは祈る必要はありませんでした。しかし、アブラハムの子孫として肉体を身にまとわれた人間としては、祈りは、アブラハムとその子孫の全員にとってと同様、イエスにとっても本質的なものだったのです。

キリストの地上でのお働きの始まる 1500 年近く前のこと、モーセは宣言しました。「あなたの神、主は、あなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のようなひとりの預言者をあなたのために起こされる。彼に聞き従わなければならない」（申命記 18:15）。キリストは、モーセととても多くの点で似ておられます。例えば、どちらも、生まれた時に王の怒りから奇跡的に守られましたし、どちらも人々を救う存在となりましたし、どちらも謙遜な者と描かれています（民数記 12:3、マタイ 11:29 参照）。

両者の共通点をここですべて辿ることはできませんが、祈りの歩みにおける両者の明確な類似点については言及しておきたいと思います。

上巻(旧約篇)の第2章で既に見たように、モーセの全生涯は祈りによって支配され、祈りに基づいたものでした。キリストも同じでした。キリストの歩みと働きにおいても、祈りは、あらゆる側面と局面で非常に顕著なものでした。キリストの公生涯は3年半の短いものでしたが、聖書はその間の具体的な祈りを数多く引用しています。そして、モーセにとってと同様、イエスにとっても、祈りというものがまさに命の息であったことを明確に示す証拠が存在するのです。イエスは、規律のある生活を送られました。福音書にはいくつか習慣としてなさっていたことが見られます。一つは定期的に安息日に会堂に出席するということでした。そこにはもちろん、祈りの時が含まれていました（マタイ 21:13、ルカ 4:16 参照）。イエスが、その時々どこにおられたかによって、会堂や神殿に毎日、足を運び、祈りの時を持っておられたと考えても、あながちおかしいことではありません。

イエスが常に祈りの姿勢を保っておられたという考えを支持するものとしてはまた、「いつでも祈るべきであ

り、失望してはならない」(ルカ 18:1) という、弟子たちへの率直な宣言があります。さらに、聖書を見れば、イエスが公生涯を始められた時点で、祈りに対して確たる思いと、祈りにより頼む姿勢を抱いておられた様子が示されています。「さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた」(マルコ 1:35)。他の箇所を見ても、これが継続的で規則正しい行いであったことがわかります(マタイ 14:23、マルコ 6:46、ルカ 5:16、9:18.28)。さらに、そのお働きの中でも、重要な局面に際しては祈りが特に大切な役割を果たしていたことがわかるのです。

